

洋灯

横光利一

青空文庫

このごろ停電する夜の暗さをかこっている私に知人がランプを持って来てくれた。高さ一尺あまりの小さな置きランプである。私はそれを手にとって眺めていると、冷え凍っている私の胸の底から、ほとほと音立てて燃えてくるものがあつた。久しくそれは聞いたこともなかつたものだというよりも、もう二度とそんな気持を覚えそうもない、夕ごろに似た優しい情感で、温まっては滴り落ちる雫しずくのような音である。初めて私がランプを見たのは、六つの時、雪の降る夜、紫色の縮緬ちりめんのお高祖頭巾こそずきんを冠かぶつた母につれられて、東京から伊賀の山中の柘植つげという田舎町へ帰つたときであつた。そこは伯母の家で、竹筒を立てた先端に、ニツ

ケル製の油壺あぶらつぼを置いたランプが数台部屋の隅に並べてあつた。その下で、紫や紅の縮緬ふくぎの袱紗ふくぎを帯から三角形に垂らした娘たちが、敷居や畳の条目すじめを見詰めながら、濃茶こいちやの泡かの耀かがやいている大きな鉢を私の前に運んで来てくれた。これらの娘たちは、伯母の所へ茶や縫物や生花を習いに来ている町の娘たちで二三十人もいた。二階の大きな部屋に並んだ針箱が、どれも朱色の塗で、鳥のように擡もたげたそれらの頭に針がぶつぶつ刺さっているのが気味悪かつた。

生花の日は花や実をつけた灌木かんぼくの枝で家の中が繁しげつた。縫台の上の竹筒に挿した枝むかに對い、それを断きり落す木鋏きばさみの鳴る音が一日していた。

ある日、こういう所へ東京から私の父が帰つて来た。父は夜になると火薬をケースに詰めて弾倉を作った。そして、翌朝早くそれを腹に巻きつけ、猟銃を肩に出ていった。帰りは雉子きじが二三羽いつも父の腰から垂れていた。

少いときでも、ぐったり首垂れた鳩や山鳥が瞼まぶたを白く瞑つむっていた。父が獵に出かける日の前夜は、定きまつて母は父に小言をいった。「もう殺生だけはやめて下さいよ。この子が生れたら、おやめになると、あれほど固く仰おっしゃ言いったのに、それにまた——」

母が父と争うのは父が獵に出かけるときだけで、その間に坐すわっていた私はあるとき、

「喧嘩けんかもうやめて。」

と云うと、急に父と母が笑い出したことがある。しかし、父の
獵癖は止まらなかつた。一度、私は獵銃姿の父の後からついてい
つたことがあつた。川を渡つたり、杉の密集がけしている急な崖をよ
じ登つたりして、父の発砲する音を聞いていたが、氷の張りつめ
た小川を跳び越すとき、私は足を踏みすべ込らして、氷の中へ落ち込
み、父から襟首を持って引き上げられた。それから二度と父はも
う私をつれて行つてはくれなかつた。

父がまた旅に立ってしばらくしたある日、私は母につれられ隣
村へ行つた。沢山な人が私のいつたその家に集つていて、大皿や
鉢ごぼうに、牛蒡ごぼうや人參にんじんや、鱈や、里芋などの煮つめたものが盛つて
ある間を、大きな肩の老人が担がれたまま、箱の中へ傾けて入れ

られるところだった。それが母の父の死の姿だった。また、人の死の姿を私の見たのはそれが初めだった。日が明るかった。そしてその村からの帰りに道路の水溜りのいびつに歪ゆがんでいる上を、ぽいツと跳び越した瞬間の、その村の明るい春泥の色を、私は祖父の大きな肩の傾きと一緒に今も覚えている。祖父の死んだこの家は、私の母や伯母の生れた家で、母の妹が養子をとっていたものであった。

伯母の家に半年もいてから、私と母と姉とは汽車に乗り琵琶湖の見える街へ着いた。そこに父は新しく私たちの棲すむ家を作つて待つていてくれた。そこが天津であった。私は初めてこの小学校へ入学した。湖を渡る蒸気船が学校のすぐ横の棧橋から朝夕出

ていったり、這^{はい}入つて来たりするたびに、汽笛が鳴つた。ここの学校に私は一ヶ月もいると、すぐ同じ街の西の端にある学校へ變つた。家がまた新しく變つたからであるが、この第二の学校のすぐ横には疏水^{そすい}が流れていて、京都から登つて来たり下つたりする舟が集ると、朱色の関門の扉が水を止めたり吐いたりした。このころ、この街にある聯隊^{れんたい}の入口をめがけて旗や提灯^{ちようちん}の列が日夜激しくつめよせた。日露戦争がしだいに高潮して来ていたのである。疏水の両側の角刈にされた枳殼^{からたち}の厚い垣には、黄色な実が成つてその実をもぎ取る手に棘^{とげ}が刺さつた。枳殼のまばらな裾^{すそ}から帆をあげた舟の出入する運河の河口が見えたりした。そしてその方向から朝日が昇つて来ては帆を染めると、喇叭^{らっぱ}のひびき

が聞えて来た。私はこの街が好きであつた。しかし私はこの大津の街にもしばらくよりいられなかつた。再び私は母と姉と三人で母の里の柘植^{つげ}へ移らねばならなかつた。父が遠方の異国の京^{けいじよ}城^うへ行くことになつたからである。小学の一年で二度も学校を変えさせられた私は、今度はもとの伯母の家からではなく、祖父の大きな肩の見える家から学校へ通つた。

私はこの家で農家の生活というものを初めて知つたのだつた。それは私の家の生活とは何ごととも違つていた。どちらを向いても、高い山山ばかりに囲まれた盆地の山ひだの間から、蛙の声の立ちまよつてゐる村里で、石油の釣りランプがどこの家の中にも一つずつ下つていた。牛がまた人と一つの家の中に棲んでいた。

私がランプの下の生活をしたのは、このときから三年の間である。私はこの間に、まだ見たこともない大きな石臼いしうすの廻まわるあいだから、豆が黄色な粉になって噴きこぼれて来るのや、透明な虫が、真白な瓢ひさごがた形まゆの繭をいっぱい藁わらの枝に産み作ることや、夜になると牛に穿はかす草履ぞうりをせつせと人人が編むことなどを知った。また、藪やぶの中の黄楊つげの木の胯またに頬ほお白しろの巣があつて、幾つそこに縞しまの入った卵があるとか、合歡ねむの花の咲く川端の窪くぼんだ穴に、何寸ほどの鯰なますと鰻なますがいるとか、どこの桑の実には蟻がたかつてどこの実よりも甘味あまいとか、どこの藪の幾本目の竹の節と、またそこから幾本目の竹の節とが揃そろつているとか、いつの間にか、そんなことにまで私は睨にらみをきかすようになったりした。

しかしこうしている間にも、私らは祖父の家から独立した別の家に棲んでいて、村村に散っている親戚しんせきたちの顔を私はみな覚えた。母は五人姉妹の下から二番目で、四人もあるその伯母たちの子供らが、これがまたそれぞれ沢山いた。一番上の大伯母は、この村から三里も離れた城のある上野という町にいたが、どういうものだか、この美しい伯母にだけは、親戚たちの誰もが頭が上らなかつた。色が白くふつくらとした落ちつきをもっていて、才智が大きな眼もとに溢あふれていた。またこの大伯母はいつも黙って人の話を聞いているだけで、何か一言いうと、それで忽たちまち親戚間のごたごたが解決した。ときどき実家のあるこの村へ来ても、どこの家へも行かずに私の家へ来て泊っていったが、ある日伯母は

東京へ行つて来たといつて私に絵本を一冊土産にくれた。それは東京の名所を描いた絵本だった。そのころは、私はもう私のいた筈はずの東京を忘れていて、私の一番行きたいところは、湖の見える大津と大伯母のいる上野の町とであつた。この伯母には子供が五人もいた。遊女街の中央でただ一軒伯母の家だけ製糸をしていたので、私は周囲にひしめき並んだ色街の子供たちとも、いつのまにか遊ぶようになったりした。

二番目の伯母は、私たちのいた同じ村の西方にあつて、魚屋をしていた。この伯母一家だけはどの親戚たちからも嫌われていた。大伯母などは一度もここへは寄りつかなくなつたが私の母だけこことも仲良く交際していた。むかしはここは貧乏で、猫撫ねこなで声のこ

の伯母は実家の祖父の家から、許可なく魚屋へ逃げるように嫁いだのだということだったが、このころは祖父の家より物持ちになっていた。この伯母の主人はいつもにこにこした眼尻めじりで私を愛してくれた。私は祖父の家の後を継いでいる養子よりも、この魚屋の主人の方が好きだった。

「おう、利よ、来たかや。」

こんな優しい声で小父がいうと、けちんぼだといわれている伯母が拾銭丸しっせんだまをひねった紙包を私の手に握らせた。ここには大きな二人の姉弟があつたが、この二人も私を誰よりも愛してくれた。三番目の伯母は、私たちが東京から来たとき厄介になつた伯母である。この伯母は氣象が男のようにさっぱりしていた。この伯

母の主人は近江おうみの国に寺を持つている住職で、一人息子もまた別に寺を持つていた。伯母は家の中の拭き掃除そうじをするとき、お茶や生花の師匠のくせに一糸いとも纏まとわぬ裸体でよく掃除をした。ある時弟子の家の者が歳暮もちの餅もちを持つてがらりと玄関の戸を開けて這入つて来た時、伯母は、ちようどその縁側を裸体で拭いていた。私にはらはらしてどうするかと見ていると、

「これはまあ、とんだ失礼をいたしましたして、」

と、伯母は、ただ一寸ちよつと雑巾ぞうきんで前を隠したまま、鄭重ていちょうな

お辞儀をしたきり、少しも悪びれた様子を示さなかつた。またこの伯母は、主人がたまに帰つて来てもがみがみ叱しかりつけてばかりいた。主人の僧侶そうりよは、どんな手ひどいことを伯母から云われて

も、表情を怒らしたことがなかった。

「お光^{みつ}、お前はそんなこと云うけれども、まアまア、」

といつも云うだけで、どういふ心の習練か恐るべき寛容さを持ちつづけて崩さなかつた。

四番目の叔母は私の母とは一つ違いの妹だつた。でつぶりよく肥えた顔にいちめん雀^{そば}斑^{かさ}が出来ていて鼻の孔^{あな}が大きく拡^{ひろ}がり、揃^まつたことのない前^{まえ}襟^{えづま}からいつも膝^{ひざ}頭^{がしら}が露出していた。声^{こゑ}がまた大きなバスで、人を見ると鼻の横を痒^かき痒^かき、細い眼でいつも又この人は笑つてばかりいたが、この叔母ほど村で好かれていた女の人もあるまいと思われた。自分の持ち物も、くれと人から云われると、何一つ惜しまなかつた。子供たちを叱るにも響き

わたるような大声だったが、それでも笑って叱っていた。

青空文庫情報

底本：「昭和文学全集 第5巻」小学館

1986（昭和61）年12月1日初版第1刷発行

底本の親本：「定本横光利一全集」河出書房新社

1981（昭和56）年6月～

入力：阿部良子

校正：松永正敏

2002年5月7日作成

2012年7月3日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

洋灯

横光利一

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>